

(4) ヘビトンボ目・アミメカゲロウ目

選定・評価方法の概要

ヘビトンボ目とアミメカゲロウ目は、共に脈翅系昆虫に属する分類群であることや、解説に共通する部分が多いこと、などの理由により、ここでまとめて扱う。

東京都本土部からは、上記2目にラクダムシ目を加えた広義のアミメカゲロウ目として、現時点で63種(東京都本土部昆虫目録作成プロジェクト、<http://tkm.na.coocan.jp/page023.html>,2022年2月2日閲覧)が記録されている。今回はこれらのうち、評価に資する情報がある程度集積できたセンブリ科、ヘビトンボ科、ツノトンボ科、ウスバカゲロウ科について検討を行った。ラクダムシ目(確実に記録されているのはラクダムシ1種のみ)についても検討を行ったが、評価に資する基礎的な情報がほとんどないために対象外とした。

客観的な評価を行うためには、過去から現在に至る各種の分布、生息状況、その変化の把握が不可欠である。しかし、東京都における近年のものとしては、皇居(塚口, 2000)、八王子市(松原, 2016a・b・c)の報告などが見られる程度で、地域レベルにおいてもまとまったものは少なく、基礎資料として利用可能な本土部全域を対象としたものは全くない状況である。そのため、個々の報告や情報の集積により把握を試みたが、定量要件による評価を行うには極めて不十分であったことから、評価はすべて定性要件によって行った。評価にあたっては文献資料のほか、聞き取りなどの情報、隣接県での生息状況なども参考とした。現地調査ならびに標本資料調査も一部実施したが、時間的制約などから十分な調査は出来なかった。過去の記録は確実なものであれば戦前のものも含めて採用した。

選定・評価結果の概要

ヘビトンボ目については、前回(本土部レッドリスト2010)で選定された5種について評価を行った結果、全種が何れかのランクに評価された。DDと評価されたものは、本土部における記録の状況から絶滅危惧に該当すると考えられるものの、現時点において評価に資する情報が極めて不足している種である。なお、前回(2010年)記載のクロセンブリ *Sialis melania tohokuensis* は、その後、分類の再検討が行われ、東京都の個体群はトウホククロセンブリ *Sialis tohokuensis* として独立種となったため、今回はトウホククロセンブリとして記載した。アミメカゲロウ目においては、前回改定時に確実なものとしては平山(1933)に図示された多摩部の記録しか見出すことができなかったキバネツノトンボについて、標本資料調査によって図示された標本の現存が確認され、新たに区部の記録も見出された。具体的な記録が不明となっていたオオウスバカゲロウは文献調査により明らかとなったため、今回評価を行った。これらの種は採草地や河川敷などの草地や砂礫地に生息する種であり、共に戦後の記録は見いだせない。このことは、かく乱環境に依存している種の衰退が、チョウ類や甲虫類などよく知られているものだけでなく様々な分類群で起きており、必要とする環境要素自体が種の生息を担保できる以下のレベルにまで減少していることを示していると考えられる。

センブリ科とヘビトンボ科は幼虫が水生であり、生息環境の破壊改変等に脆弱であることから、将来的にはより減少する可能性が極めて高い。しかし、その現存分布や生息状況はよく把握されていないことから、保全上の観点からも、現地調査を通じてなるべく早い機会に明らかにしておく必要がある。

今回評価できなかった種の中にも、評価に資する情



キバネツノトンボ
板橋区 1943年
東京大学総合研究博物館所蔵

報が集まれば絶滅危惧に該当すると考えられるものもある。これらの評価を行うことが今後最も重要な課題となり、前回改定からの懸案にもなっている。そのためには評価検討作業に十分な時間をかけて更なる文献資料を収集することに加え、現地調査を密に実施し、種の情報を系統的に集積することが必要である。
(須田 真一)

引用文献

- 平山修次郎, 1933. 原色千種昆虫図譜. 186pp.+104pls.
松原豊, 2016a. ヘビトンボ目. 新八王子市史自然調査報告書八王子市動植物目録: 292.
松原豊, 2016b. ラクダムシ目. 新八王子市史自然調査報告書八王子市動植物目録: 293.
松原豊, 2016c. アミメカゲロウ目. 新八王子市史自然調査報告書八王子市動植物目録: 294-295.
塚口茂彦, 2000. 皇居の脈翅類. 国立科学博物館専報, (36): 109-113.

写真提供者

東京大学総合研究博物館